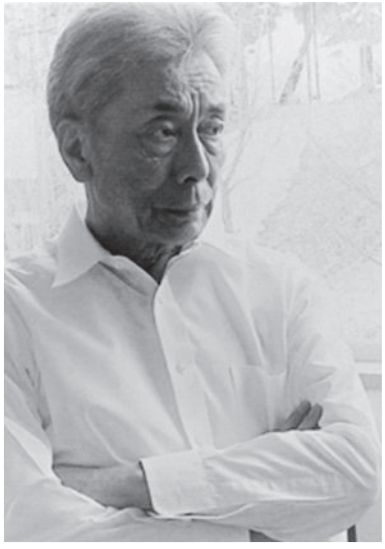
●発行・編集 全道美術協会事務局 川本ヤスヒロ方 TEL0133-73-7315 〒061-3202 石狩市花川南2条2丁目121●HP http://www.zendouten.jp●印刷 株式会社アイワード

ZEN 全道展交流紙
2017.9
No.54

第72回全道展審査を終えて



総合審査委員長
絵画部門審査委員長
羽山　雅愉

ひと時の安らぎしか手に入らない造形の日々から這い出して、審査会場に向かう。

札幌市民ギャラリーに一歩足を踏み入れると何時ものことだが、絵画、版画、彫刻、工芸の4部門の700点近くの出品作品がひしめいている。その膨大な作品群に接すると、審査する責任感からくる緊張と、新しく優れた作品に出合える期待の喜びが交差する。

審査は2日間、約10時間。凝縮された集中力が必要で半日もしないうちに疲労し、体力と精神力が要求される。

審査の基準はおのずと会員一人ひとりが持っているし、美しさの基準も又個人的なものだ。ひいて私が今まで歓迎してきた作品はといえば、高い技術力があっても小さくまとまった作品よりも「何かいいものを持っている」もの。いわゆる破綻のない作品より、その作家のつぶやきのような小さなものでも、新鮮な感受性が伝わってくる作品に将来性を抱いてきた。

今回の絵画部門は特に今までの審査のあり方を再確認し、より慎重に審査をする事とした。その中で、協会賞の作品は昨年、学生美術全道展で最高賞の協会賞を受けたばかりであったが、大胆な構図と勢いのある描法で見るものを圧倒するエネルギーに満ちていて、「良いものは良い」とする全道展の気風が明確であった。又、そのスタンスから2点入選の傾向がここ数年からあり、より作家の魅力が伝わる展示になると思う。

こうして受賞・入選した作品の総てが会場に展示された時「全道展とは何か？」の実像が浮き彫りにされる。願わくは「質の高い作品を創る」という事が会員、一般を問わず全道展に関わる人びとの唯一の目標であり、お互いが刺激し合える集合体であることが垣間見ることができれば、この公募展の存在意義も又あるという事ではないだろうか。

2年前、70周年記念展のタイトルを「70年 ── 新生する全道展 ──」とし、昨年から23歳以下の出品者に出品料半額、入場料無料を打ち出し、早くもその効果が出たのか、協会賞の作家も若者であるし他の部門も若者の出品者が増えつつあるという。八木賞もしかりである。ここ近年の若者の新鮮な発想力と創作への挑戦は嬉しい限りであるし、又、80代の大作出品者もいて頭の下がる思いがする。

こうした全道展の立ち位置と視線が間違えなければ、必ず次世代の作家たちの将来が輝かしい喜びに満ちたものであろう事を信じたい。

各部門の審査を終えて

より切磋琢磨を
―若い作家に期待―

版画部門
審査委員長
和田バロウズ裕子

今回入選された皆様、受賞された皆様、新会友、新会員になられた皆様、おめでとうございます。版画部門の審査の様子や感想などを述べさせていただきます。

八木賞の木全佑衣さん。エッチングとリトグラフの併用という難しい技法を用いて、ファンタジーのある世界を作っています。23歳以下の若い作家ということで審査会場は盛り上がりました。今年は23歳以下の方が良い作品を多数出品され、将来に希望が持てます。

会友賞の三浦正志さん。光の射し込む古い坑道というおもしろい題材で、光と影の効果的な力強い画面を作っています。多数の手が挙がりました。

新会員になられた浅川良美さん。動物への愛情が出ていて、独特の世界を持っています。共に新会員になられた中嶋詩子さん。水に映る樹影と水に浮かぶ葉を美しく描き上げています。ていねいな作品に感心しました。

新会友になられた藤林峰夫さん。日暮れに浮かぶ打瀬舟を中間色で美しく情緒深く表現しています。同じく新会友の谷博さん。雪の風景を柔らかく描いています。動きのある構図も効果的です。

佳作賞の佐藤一さん。広々した風景をていねいに描いています。同じく佳作賞の志摩利希さん。多色刷りのエッチングで物語性のある世界を作っています。

初出品で奨励賞を受賞された渡邉仙司さん。エッチングのきっちりとした線で楽しく表現しています。これからも続けて出品して下さい。奨励賞の岡島章子さん。不思議な動物をエッチングの線で黒々と描いています。白と黒がきれいです。同じく奨励賞の鈴木葉月さん。23歳以下の若い作家です。シルクスクリーンの彼女の作品を見ると、若い人にしか描けない新鮮な感覚だとうらやましくなりました。

版画の作品は絵の内容と共に、高度な技術も要求されます。自分に合った技を磨いてがんばりましょう。

厳しい現実は時代を反映

彫刻部門
審査委員長
田中　隆行

今年の彫刻部は、一般応募点数18点、厳選な審査の結果、入選は10点となった。彫刻は、年々出点数の減少に歯止めが利かない感がする。私が一般で出品していた頃は、搬入会場に所狭しと彫刻が並べられ入落に一喜一憂していたことを思い出す。自宅にある一番古い図録を開いてみると、一般応募点数83点、入選点数40点と記載されていた。今から35年前のことである。なぜ、こんなにも減ってきたのだろうか。また、今年は特に若手が少なく抽象作品も寂しかった。公募展離れもあるが、作家が少なくなってきているのではないか。制作したくてもできない、そんなゆとりのない世の中になっているようである。学生の頃は、思う存分制作できたが、就職すると仕事に追われ、特に彫刻は施設設備が揃わなければ彫刻から離れていくのは時間の問題である。協会賞を受賞し期待していた若手作家が出品してこなくなる。非常に残念に思うが、同時に困難を克服し再度出品されることを願ってやまない。

近年、仕事で長く制作できないでいたが、退職を機に出品される方が出てきた。道新賞を受賞された高橋さんもその一人である。時間をかけじっくり追求された大作である。それだけに安心してみていられる存在感のある作品だ。また、昨年会友になられた佐藤さんも早々に会友賞を受賞された。長く制作できなかった分、堰を切ったように意欲的に制作され完成度の高い作品を発表されている。佳作賞を受賞された川橋さんの作品は寄木の技法で木彫の新たな展開が期待できそうだ。また、会友の作品にもいい作品が多かった。長く地道に制作され安定した力を蓄積されているものであるが、その中でも水口さんと今谷さんの作品が評価され会員に推挙された。これまでの仕事にプラス新しい試みの表現がみられた作品であった。

今年の彫刻部審査を通して感じたことは、作品数の減少はあるものの質は落ちていないことである。更なる高い表現の場となるよう学び合う「全道展」を創造したいものである。

工芸部門　審査委員長　石山　和雄

陶芸作家の発掘が急務

２日目の搬入受付に立合った。当日の搬入は、ほとんど無く、ここ数年、搬入点数は減少気味で、今年は一般の部で最少となった。審査を前にして、会員の中から、この状態を改善するために何をなすべきかの発言を受けて、話し合いがもたれたが、具体的対応策も浮かばないまま審査に入った。

一般の部の搬入点数は15点（12名）で染織：９点、木：４点、陶：１点、漆：１点であった。染織が増えた一方陶は１点と大巾に減少した。陶芸分野の発掘がカギとなるのか……。ここでは、会員、会友推挙者及び入賞者の作品について評論します。

新会員の堀田佳代さんの陶「覗く」は深みのある赤を前面に出しアクセントとして堀田さんの持ち味である白黒の模様をあしらった表現は新境地を発揮した作品である。今後に期待したい。会友賞の阿部栄さんの金属「細胞分裂」は細胞１個の核の部分を鉄、染色体の部分をアルミで表現した。本人いわく、分裂して次の作品が形作られる原点となる作品にしたとの事。どの様に変化していくのか楽しみにしたい。北海道新聞社賞、新会友の小杉教一さんの漆「鎮魂の賦―友へ」は中心部分の緑が徐々に薄緑となり、さらに中心は白に変化する様は、はるか宇宙の果てに吸い込まれそうな幻覚を感じた。格調のある作品です。佳作賞の原あけみさんの染織「古布の秋」は織り全体が透けた状態でアイヌ文様とは異なる現代的な文様を裂織りで表現し、好感の持てる良い作品である。奨励賞の池田康弘さんの木「ハマナス咲き誇る」は細密な彫りが冴え渡り力強い作品である。奨励賞の佐藤久美子さんの染織「私は森の見張り役」は絞り染めにより14羽のフクロウがそれぞれの表情で森を見守っている様を表現してる。温かい作品です。奨励賞の保坂順一さんの陶「静謐」は軟らかい曲線と白を基調とした穏やかな表現で見る者の心を穏やかにさせてくれる作品である。

工芸とは「用と美」、「美と生活の調和」等と言われます。工芸を志向する者として、この意味を噛み締めて一歩一歩進んでいきたいものです。

真剣な眼差し…各部門の審査風景

第72回全道展は絵画・版画・彫刻・工芸の４部門に、490点の一般応募があった。このうち206点が入選、29点が入賞となった。

キャリアのあるベテランと特に最高賞の全道美術協会賞をはじめ、若い人達の意欲的な作品が受賞に繋がった。今年の審査は例年にも増して活発な意見が交わされ、熱が入ったものになった。

若い人達が応募しやすいように、昨年から23歳以下の出品料を半額の4000円にしたことで、昨年の10名が今年はほぼ２倍の19名に増えた。このことを踏まえ全道展では今後も更に、潜在層へのアピールや工夫をしていくとしている。

第72回全道展　2017年6月14日(水)～6月25日(日)

結果を出して、また一歩前進！

―6月17日(土)全日空ホテル授賞式会場―

全道美術協会賞　〔絵画〕木村　麻衣＝札幌市

今回の作品は大学の卒業制作として制作したものでした。学生生活を締めくくるものとして描いてきましたが、学内の先生方からは厳しい言葉をもらい、自分でも納得のいっていない部分が多かったため、途中一度絵を壊しもう一度描きなおすことをしました。紆余曲折を経て苦悩した結果自分自身と向き合うことができ、得られたものは大きかったと思います。

川本事務局長より全道展最高賞の授与

北海道新聞社賞　〔絵画〕三谷　佳典＝音威子府村

昨年より大阪から北海道に居を移し、冬の北海道の自然を久しぶりに車の運転席から見たときの感情を画面にそのまま落とし込みました。また、日本画の絵具は顕微鏡で見ると色んな色が混ざっていて、まさに自然からの贈り物であり、次世代の方々にも日本画の魅力を広めていけたらと思い、出品させていただきました。今後もより、精進し、北海道の美術文化の発展に尽力したい。

北海道新聞社賞　〔彫刻〕高橋ひとみ＝滝川市

久しぶりの全身像は、乾燥しきった粘土を砕いて練り直し持っている力の200％で造った。なんとか形にはなったが満足感はなく「きっとダメだな……」と諦めていた。突然『北海道新聞社賞』という朗報が舞い込んだ。何度もジャンプした。だが、これからどうしよう……褒められ過ぎた。困った。300％の力は出ない。でも時間だけはある。それを味方に頑張ろう……っと。

北海道新聞社賞　〔工芸〕小杉　教一＝札幌市

七五歳を過ぎると、年末には知人、友人の訃報が多くもたらされます。昨年も一月、三月に大学時代の友人が故人となりました。共に芸術の道に志を立て、切磋琢磨して来た友でした。作品の題「鎮魂の賦―友へ」は真に彼等へのレクイエムとして描きました。賞を戴き、良い餞（はなむけ）になりました。

八木賞　〔絵画〕佐々木　舞＝札幌市

全道展に出品するにあたって、私は自然の一部と化した建物（人工物）を大画面で描きたいと思い取材に行きました。しかしこのような大きな作品を制作するのは初めてのことで、完成までは試行錯誤の繰り返しでした。今回の経験や講評会で様々な先生からお聞きしたアドバイスをこれからの制作にも生かしていきたいです。

八木賞　〔版画〕木全　佑衣＝札幌市

この度は、このような賞をいただきまして、ありがとうございます。まだまだ未熟ですが、これからも制作に真摯に向き合いがんばりたいと思います。

指導して下さった先生方や、応援して下さった方々に深く感謝し、これからもひた向きに制作を続けたいです。よろしくお願いいたします。

佳作賞　〔絵画〕佐藤　正行＝小樽市

62歳で全道展に初応募し新聞に自分の名を見つけ、うれしくて何度も何度も確認しました。大きな画面に手こずりながら3年入選出来、次の年は自分の歳を考え止めました。しかし会場で自分より年上の先生方の熱い作品に触れ、あと何年かかろうと受賞出来るまで出し続けようと決心。ところが今回思いもしなかった賞が舞い込み、はて、さて、この先どうしたものかと……。

佳作賞　〔版画〕佐藤　一＝札幌市

仁木町の農村公園から余市方向を眺めた画で、たくさんのビニールハウスがフルーツの郷を象徴しています。現在、風景を主体に制作していますが、混みあった木々や草の処理が難しく大きな課題となっています。すっきりした風景画を目指して勉強していきたいと思います。

佳作賞　〔彫刻〕川橋　雪弘＝帯広市

木は束になるととてつもなく重くなる。それで軽く造るために板や棒状の木を貼り合わせ、中を空洞にした。それでも重いので一度表面が出来あがったものを真っ二つに切り、内側の木を彫る（内刳：うちぐり）等々試行錯誤し、それでも造る楽しさは途絶えることなく2年がかりで完成した作品です。木を圧着し貼り合わせ固定するのに苦労しましたが、途中のその姿が最高にCool。

佳作賞　〔工芸〕原　あけみ＝富良野市

今度、佳作賞を受賞させていただきました。第70回展より出品して3回目になります。とても楽しかったです。今回の作品の「古布の秋」は、私の大好きな木綿の模様の違う絣の古布がたくさん集まりましたので、それを使用して織りました。これからも、勉強しながら、楽しみながら織っていきたいと思います。

新会友　〔絵画〕石井　洋一＝旭川市

いままで、12回程入選し、やっとこの2、3年続けて、受賞できるようになりました。作品のテーマについては、子供時代の祭りの「みこし」やサーカスのイメージがあり、シャガールやルオーのサーカスの画集をみて、描いてみたいと思ったことです。特にピエロについては、子供にも人気があり、みていて、夢がわいてくるような気がします。

新会友　〔版画〕谷　博＝札幌市

風景木版画で、見る人の心をとらえることができればと思っています。作品の前で5秒でも10秒でも立ち止まって見つめてくれれば成功です。10秒は長い。なかなか10秒も見つめてもらえません。今のところはせいぜい1～2秒です。いつの日か（もう歳で先は短い）10秒見つめてもらえる作品をものにすることができればと願っています。

新会員　〔絵画〕佐藤　弘法＝札幌市

全道展初出品は大学時代。みごと落選。30年以上前でした。大学卒業後しばらく絵を描かない時期があって、再挑戦は18年前。55回展に出品し、初入選。そして、だらだらと今に至る。自分らしさの追求、過去の自分にとらわれず常に新鮮な気持ちで新しい自分を表現しようとキャンバスに向かっている。これからも情熱を失わず同じ気持ちで挑戦していきたい。

新会員　〔版画〕浅川　良美＝江別市

木版画を始めてよかった、と特別に感じるのはお正月。子供達の『あけおめ』メールとは相反して、私には色鮮やかな趣のある年賀状が何枚も届く。新年の招福を祈りながら描かれた絵は、どれも平和の使者のようである。後で見返しても、また、新鮮な気持ちで対面できることが嬉しい。願わくば、誰もが生活の中で「絵を楽しむ豊かさ」を感じられるお手伝いができればと思います。

新会員　〔彫刻〕水口　司＝北斗市

「沖縄の記憶Ⅰ」を出品してから早11年が過ぎた。その間、刺激とインスピレーションを求め4回沖縄の土を踏んだ。沖縄の風と光の中に自分を置き、ガマに入り、そして琉球音楽とシーサーと泡盛を味わいながら72年前の凄惨な地上戦に想いを巡らせ、現在も基地問題に体を張って闘い続けている沖縄の人々に力をもらいながら、平和を希求する制作（闘い）は未だ道半ばである。

新会員　〔工芸〕堀田　佳代＝岩見沢市

迷いを深めて半年、全く制作する気になれず、読書にふけり、自分を支えてくれる言葉を探していた。「ああもういい」突然思った。何と思われようが、自分でも出来にこだわらず、思ったままに作ろう。そう思うと制作が進んだ。今回の会員推挙は、諦めずに継続してきたことと、「自信をもって進め」という意味があると思っています。全道展のレベルを下げないよう前進します。

緊張の面持ちの受賞者たち

スクリーンで受賞作を紹介

迫力ある作品に見入る観覧者

昨年に続いてギャラリートーク

描く

ギャラリートークで「緊張と感謝」

絵画＝藤井　高志

ギャラリートークを指名され、緊張と絵を描く時に語りを意識してしまう自分がいましたが、自分の絵のバックグラウンドと作者から見た制作意図を話す機会など滅多にない訳で、よい機会を与えられたと感謝しています。幼少期に赤平という炭坑の町で灯台守の家族の映画、初の葬式に遭遇したこと、水害で様々失ったことや絵を描く父の姿など「時の断片」が絵画制作に影響しております。「孫への伝言」はせめて記憶に残る年齢までは生きたいが、微妙であり爺も孫と時を共有して生きたことを羊になぞらえて残したいというのがこの絵を描いた強い動機です。

造る

「死」というモチーフについて

彫刻＝川上　　勉

子供が生まれてから、なぜか「死」が身近に感じられるようになり、近作はすべて「死」を感じさせるモチーフで制作しています。しかし、それらは「メメント・モリ」的な啓発ではありません。もちろんそのように受け取ってもらっても構わないのですが、私にとって「死」をモチーフに制作することは、そのことについて考えるための行為であり、理解しようとするための手段なのです。私は（ほぼ無自覚的にですが）「死」を認知しなければいけない状況に恐怖を感じます。「死」というものを、ことさら美しく表現したいのは、自分自身の内なる恐怖心を押さえ込みたいという衝動なのかもしれません。

刷る

時代に逆行した　二つのカケ

版画＝手島圭三郎

私は昭和30年代の半ば頃、油彩から木版へ転向しました。その時木版は時代おくれ、これからはシルクやエッチングの時代といわれました。昭和40年代の半ば頃、モテイフを北海道の野生動物としました。その時、ローカル派になってはつまらない、国際的に通用できる世界を表現しなくてはと嘲笑されました。

私の木版画で動物を主人公とした絵本が、多くの国で翻訳出版される理由が二つ、木版画はめずらしい、自分の国には木版画の作家がいないから、といわれ野生動物の世界は全国共通そして時代を超える世界だから、といわれています。私の二つのカケの結果に、多少の自負を感じています。

焼く

『不確実性に魅せられて』

工芸＝小前　晴美

私にとって陶芸の魅力は、『不確実性』という事に尽きます。構想を練り、試作を重ねた上で制作に臨んでも、想定どおりに仕上がらなかったり、逆に想定以上の仕上がりを見せてくれたりと全く予測不能です。子育て終了後、趣味として始めた陶芸が、それから二六年間、飽く事なく取り組むライフワークとなったのは、まさにこの点に魅せられてしまったとしか言いようがありません。その上、今回ギャラリー・トークをさせていただく機会を得るとは想像もできない事でした。陶芸との出会い、それに伴う人とのご縁に深く感謝する今日この頃です。

全道展 東西南北　地区だより

道内に在住する作家たちが、それぞれの地域で集い、語り合う学びの場としても、全道展地区展の持つ役割は大きい。今回から旭川と5月に発足した苫小牧地区展の活動状況を掲載する。

2017年全道展苫小牧地区展を終えて

苫小牧地区事務局　代表　小笠原実好

2016年9月から準備に入り10月に1回目の事前話し合いをしました。結果、〝開催〟を決め開催期間は2017年5月7日(日)～13日(土)とし、場所は苫小牧市民活動センター市民ギャラリーとなりました。

メンバーに通知し、苫小牧地区メンバー21人、作品数25点が集まりました。絵画、版画、彫刻、工芸の前衛的な芸術作品の数々が会場を盛り立て全道展の本展の一室を観るようでありました。

主な5人が主流となり力添えをしてくれた結果の開催となりました。

市民からは「普段中々見ることが出来ない、芸術作品を身近に感じられてうれしい」と声がありました。札幌、千歳、恵庭、浦河、白老、伊達、むかわと各方面から日々100人以上の来場があり総来場者数813人となりました。

開催初日には川本事務局長が夫婦で来場され、作品を観てアドバイスを頂きました。地区メンバーに励ましの言葉をもらい、活力となりました。

5月開催は本展にむけてのステップと苫小牧市民に対する文化高揚になったとメンバー全員が自負しています。

苫小牧地区の全道展は5年程前に〝勇払原野の画家たち展〟で開催されたのが苫小牧地区展の先がけでありました。遠藤ミマン先生（没）は苫小牧美術協会に力を入れていました。先生は常日頃、中央展での活躍を呼びかけ北海道の意気込みを訴えかけられるような作品を目指すように指導されていました。

それに応えるような苫小牧地区展だったと思っております。

最後に全道展本部、苫小牧市教育委員会、ご支援戴いた関係機関の皆様、来場された皆様に感謝とお礼を申し上げます。

全道展旭川地区報告

旭川地区事務局　代表　板谷　諭使

今回の第72回全道展では、旭川地区から23名が入選し、奨励賞に谷田貝洋子さんと村田美津子さんが受賞、新会友に石井洋一さんが推薦されました。

毎年、本展の時期に合わせてヒラマ画廊で開催している全道展旭川地区小品展では大作とはひと味違う29名の作品が並び、小さいながらも見応えのある展覧会となりました。

小品展会期中には旭川地区懇親会も行っていますが、今年は21名が出席しました。若手の西村会員の司会進行で始まり、写真撮影の後、冒頭に神田一明会員から、「この全道展は公募団体であり会員、会友、一般という立場が存在し、会員は審査で入落や賞を決定することになるが、会員も一般も「作家」という立場では対等であるということを忘れてはいけない。この場は「一作家」として対等の立場で芸術談義に花を咲かせましょう」というお話がありました。実際一般出品者から発想力や制作に対する姿勢など学ぶことが多くあると思いますし、作品に対する思いや制作意欲に会員だから、一般だからという優劣は存在しないと思います。

この懇親会では作家一人一人から作品に対する思いや悩み、今後の抱負等の話があり、それぞれが多くの刺激を得ることができたと思います。

この旭川地区も高齢化が見られますが、気持ちは大変若い作家が多く、エネルギーを感じました。そして、その人生経験が作品に反映されているのだと思いました。そんな旭川地区、今後も「個」が輝く作家集団であり続けることを期待しています。

創造と思索

完成の行方

〔絵画〕新井田順一＝江別市

〝今日と明日の間には、長い時間が横たわっていて、君が元気なうちに、早く処理することを学べ〟
とゲーテが残しています。

自分にとって制作と生活は、必然的なもので、互いに刺激を与え、受けながらどちらも中途半端になってはならないと、己を叱咤激励しています。時に急ぎ時にゆっくり走りつづけています。

乗りこえてきた過去、引きずっている現在、これから行く未来、その混沌とした世界をどのように表現するかは、自己の感性の瞬発力にあると思います。

心を集中させ完成に向け、気合を入れて走り出さなければなりません。創造と思索どちらが先に制作に導くかは、人それぞれでしょう。

制作過程の中で、時には思索に落ち込み、創造がはじけ、錯誤を犯し、滞り淀む。そんな時間を経て、テーマが確立されて行くのではないでしょうか。

また、なにげない日々の生活の中にもヒントがあり、興味が湧きテーマが見つかることもあります。テーマさえしっかり思いつづけていれば、いつでも創造と思索がついてきます。

構図モチーフ色あいなど、その都度頭の中のキャンバスに入力し、消したり加えたりの毎日が脳内制作です。

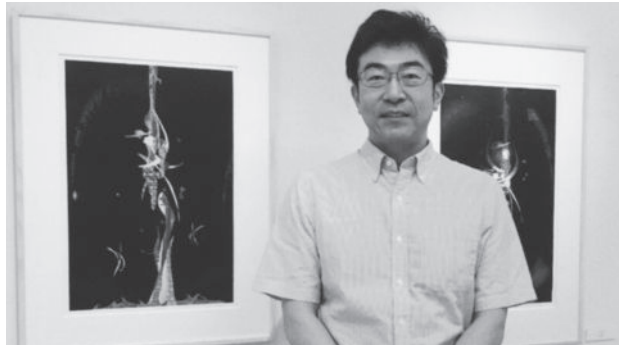
長い月日がかかることもありますが、苦しくも楽しいひとときでもあります。

制作を完了させるためには、テーマという土台を崩さず進めて行かなければならないと思います。しかし決然と進むことは、時には息苦しく、真白に戻りたいという欲求も湧いてきます。そんな時は、自分をコントロールする意志をしっかり持っていなければ目的地に辿り着けないのでは、と思います。

さまざまな葛藤を乗りこえて、完成時の達成感と自己満足に浸りながら、また今日もアトリエに籠る。

試作と思索

〔版画〕澁谷　美求＝札幌市



今年の春に過去の版の整理をした。飽きもせずよくこんなに創ったものだと感心してしまった。最近では青色の作品が主だが初期の銅版画は黒色を主にしていた。試行錯誤で手探りの制作、暗闇のトンネルの中で歩いているような感じだった。好奇心から電動ドリルを使って版にキズを付けるように描いたり、原画に忠実にしようとカッティングシートを銅版に張り付けて試作したのもこの頃だった。試行錯誤の末、深い青色の作品にたどり着いた。版画は間接技法なので版の状態、インクの種類、紙の種類、刷る時のプレスの状態を自分の作品にあったものにする事が必要でそれぞれに試行錯誤があった。だが一番の問題は作品そのものの状態だった。上手くいったと思ったところよりも、こんなものかと思った個所を、ここが良いと褒められるので、絵は難しい。たまたま良い出来になっていたものだから同じものを作るのにとても苦労するのです。失敗から学ぶ、予想外の効果が出るのが面白いところです。

次に作品の主題（テーマ）の思索について。対象が面白い、美しいと感じた感情・感覚をデッサンやメモに残しておいて画面を構成していきます。最近では自然の形態をヒントにして作品を創る様にしています。旅行先の情景や昔の人が残した作品なども制作の貴重な資料になります。またギャラリーや美術館での鑑賞も大切で、鑑賞者や作家との何気ない話からヒントを得る事もあります。作品を創るのは孤独な作業ですが志を同じくする人たちが集まると、思った以上の力が出る事があります。美術の場合は作家が大人数会場に集まるのは公募展や大規模な美術関係の集まりくらいしかないのではないでしょうか？　そこではいろいろな出会いが生まれる可能性があります。公募展は発表を通じて共に成長していけるといった利点もあるので、多くの美術ファンに愛され、出展者にとって制作意欲をそそられる全道展であり続けられるように、私も微力ながら努力していきたいと思います。

ZEN 紙上美術館

灼熱の美の求道者 —— 三岸節子(1905～1999)

「月夜の縞馬」

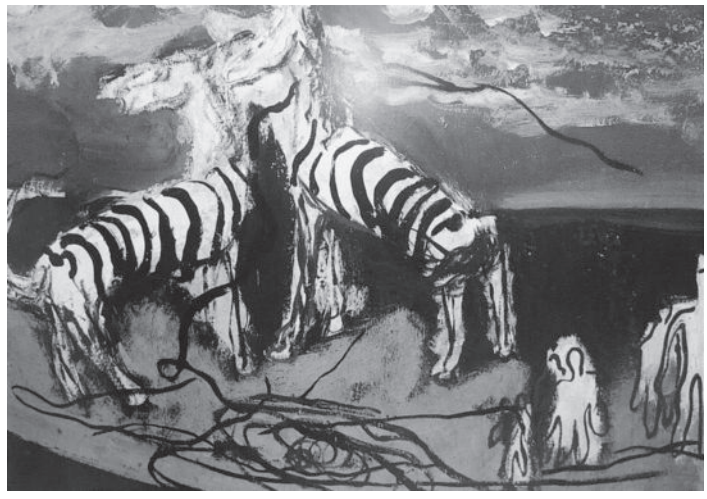
〔絵画〕木村由紀子

「青々とした山がいつの間にか紅葉し、雪が降り始め気が付くと外はクリスマスツリーの様……」2000年の10月「脊椎分離すべり症」で3か月の入院をした時に画友に宛てた手紙です。季節の流れを感じる事の無いままに術後の痛みに耐えるのが精いっぱいだったある日、いつもはそれとなく見過ごしていた山肌に宝物を見つけた一瞬がありました。春を待つ木々に陽が当たり、山影と相まってその空間に光と影の見事な折り合いがあったのです。一日中、独り占め出来たわたしの空間。一日一枚のデッサンが日課となり藻岩の禿山は、どっかりと腰を下ろす風情で私に活力を与えてくれたものです。振り返ると不安ばかりだった入院生活が、これまでの具象作品から抽象に変化する大きな転機となっていました。

さて、この度「取りあげてみたい女流作家とその作品について」との原稿依頼をいただいて真っ先に浮かんだのは三岸節子でした。三岸節子画集（求龍堂）の中で作家の井上靖氏の「三岸さんの心はいつも現役の画家として活火山のように音を立てて火を噴いている」という巻頭文が心に響きます。

節子の随筆集「黄色い手帖」の中に「描かざる絵」という節子の切なる願いが感じられる文章があります。「私は長いこと絵を描かなかった、静かに休み、いたわりたい心と、何か火山の様に爆発してくる燃焼を待っていたのである。」という箇所です。

当時の日本画壇は女性の地位はおろか、一人の優れた芸術家をも必要としない愛国の戦争画が求められていた時代、まして、描く絵具も溶き油も少なく全てに乏しい環境においてどれ程不自由な日常、創作の日々を強いられた事か、現代を生きる我々には到底想像もつかない事です。夫の好太郎亡き後も、3人の子供を育てながら魂の安らかさを求めるようにやがて、類まれなる精神力で色彩の魔術師とまで言われるような節子の世界を産み出して来た事で、わたしの求めて得られない節子の強さに



魅了され、女流であることで更に勇気を貰えました。

私はあの日から今日まで、模索し続けていた自分自身を休火山に例え「CRETOS」と題して制作していたせいか、活火山の3文字に少しばかり敏感になっていたのかも知れません。

節子の様に耐え難い屈辱を経験する事も無く、絵を描く自由を謳歌できる時代に在って尚、この重苦しい様々の迷いを取り払うには描き続ける以外に無いという事です。

「作品はこれを見た瞬間、只感動があるばかりである。絵を描いていられるその中にすべての償いがあり、慰めがあり、光明がある」という節子の言葉を今一度、胸の奥に秘め奮い立とうと思う。

節子の世界は確かな構築力、輝くばかりの色彩、画肌の美しさに加えていつの時にも自信と強さに溢れているようです。少しの迷いさえ感じられません。

パリへ行き今度は人物画を描きたいと願った節子、神から与えられた才能を存分に発揮した輝かしい94年の生涯であったと思います。

自画像として花や静物をパリを描き続けた中で「月夜の縞馬」という作品がわたしは好きです。凛とした空気感の中、時間が止まったかのようなゆっくり過ぎ行く時の流れ、そこには確かな線があり面があり、白・パープルグレイの美しく輝く世界があります。柔らかな線が走り、静けさの中で絵具のかすれの音さえ聞こえて来るようです……。

開放区コーナー

今回は２名の会友に、「私にとって公募展とは…」のテーマで思いを寄せてもらった。

外部への眼差し

〔絵画会友〕
モリケンイチ

SNSなどの情報を頼りにギャラリーを見て回るのが楽しく、週末にはできるだけ札幌市内のギャラリー巡りをすることを心がけています。ほぼ毎週知り合いの作家が何処かで展示をされているという事情もありますが、札幌のアートシーンを直に感じる機会としてとても貴重な時間だと考えています。

70周年記念賞を頂いて以来、年５回ぐらいのペースで個展を開いていることから、ここ数年で随分と知り合いの作家さんが増えました。ほとんどが全道展と関係のない方々で、ジャンルも多岐にわたりますがとても興味深い仕事をされています。

そんな中で実感するのは、北海道のアートシーンは全国的にもかなり面白いものになってきているということです。比較的アカデミズムの縛りがゆるいせいだとは思いますが、生き生きとして自由な表現が其処彼処で見ることができます。社会的な影響力という意味では公募展と比較になりませんが、大袈裟に言えば、こうした動きの中に北海道美術の独自性を感じています。

公募展は、その存在自体が広く社会に受け入れられています。地元に密着した形での美術の普及、新しい才能の発掘など、地域の中における役割も極めて重要であり、私自身、全道展のお蔭で作家活動を軌道に乗せることが出来ました。しかし、一般参加の方々や私を含めた会友の皆様が全道展に作品を発表する際には、原理的に会員の先生方に審査していただくことを前提に制作することになります。こうした構造の中において、我々審査される側は、より自由でより新鮮な表現を生むためにも、公募展以外の様々な視点や価値観を取り込んでいくことが必要に思われます。

私はフランスに６年間滞在しておりました。単純に日本とフランスを比較することはできませんが、帰国したての時期は一般の方の芸術への関心の低さに戸惑いを覚えたほどです。一表現者として、一人でも多くの方に興味を抱いて頂けるような活動を心がけたいと思っています。

終わりのないドライブ

〔工芸会友〕
阿部　綾子

デパートの食器売場を見ることが好きでした。今思えば、母の盛り付けは工夫され、目にも美味しい食卓でした。

陶芸を始めて６年が過ぎた頃、それまでは食器作りが主でしたが、教室の先輩が市展県展に向けた作品に取り組んでいて、私もその力が欲しいと。公募展との出逢いです。

家族の仕事の関係で、その時は千葉におり、千葉で賞や会員推挙を頂いたものの、次の転勤が見えてきて、私は何処でなら根を張ることが出来るだろうかと思い、将来戻るであろう札幌の公募展を調べ、全道展を選び、挑戦に至りました。現在は、福岡からの出品です。

審査を受けるということ。自分を見失わないようにと、今も心掛けています。海沿いの道をドライブ。すぐ横に海は見えない、その松林の向こうに海がある。海を感じて。このくらいの距離感が、私には丁度良いようです。

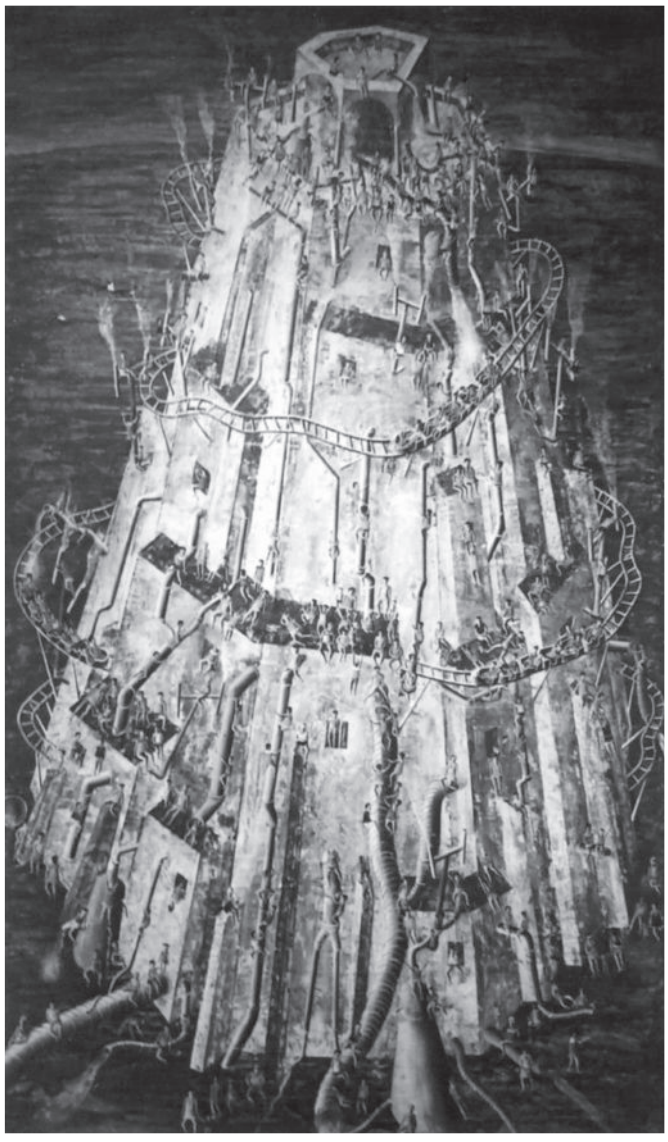
公募展向けの作品は、焼成まで約２ヶ月。窯から出してみれば大失敗。そんなことは、よくあることで、鍛えられます。その緊張と解放と後味と。これが私を夢中にさせている要因のひとつかなと思います。

陶芸を始めて15年、何とかひとりで立てるようになったところです。これから先、５年後、10年後、20年後、30年後……、見える風景は変わってゆくのでしょう。

土にこだわる、釉にこだわる、焼きにこだわる、形にこだわる……、全部やってみたいけれど、何人分の人生があっても足りません。

自分は何がしたいのか、その時々の気持ちを大事に、遠回りも、寄り道も。ハンドルから手を離さず、走り続けたい。

ART STAGE
―作 家 の 痕 跡―



「ただよう拾得物」
―― 矢元政行展を観て ――

深川市アートホール東洲館
館長　渡辺　貞之

3点とも左の作品の拡大部分

矢元政行氏の作品といえば、得体の知れぬ造形物、廃屋まがいの家屋、現実にはあり得ない遊園地。そしてそれに群がる無数の人間たち……。

私は、彼の作品を観るとき、その無数に群がる人間一人一人をあえて丹念に見ようとします。それは作品を俯瞰して見たときにあまりにも小さな、そして蟻のように群がる人間模様に、その存在のはかなさや無意味さを感じてしまうからなのです。

複数イメージが増殖する世界。どんなイメージもしだいに類似性を帯び、平均的になり、したがって個が埋没してどれもが似たり寄ったりに感じてしまう人間たち。それを見つめている私も、自身の存在のはかなさを強く思い知らされることになるのです。本来であれば互いに関係し合う人間たちが、現代社会の空間を漂流する根無し草、あるいは記号のようなものになって描かれ、しかもそれぞれの人間が並列的に表現されているということは、「それは誰でもいいのだ」と言うことなのでしょうか。

このように、彼が表現する拾得物のようなものは、現実世界の引用としてどの作品にもほぼ同じような要素や様式として切り詰められ、単調に反復表現されています。しかしその内実は、ひょっとして本人もあえて不可知のままになっているのではないかと思えるのです。それ故に、私は描かれている小さく群がる一人一人の人間を凝視することで、せめてその瞬間だけでも、その人間に「生と存在」を鼓舞させてやりたいという衝動にかられるのです。

彼の作品にはいつも、負の匂いが漂います。明るい花とか、美しい風景とか、魅力的な人物とか、そういう類の作品はほとんどみかけません。彼の作品で埋め尽くされたギャラリーの中央に佇むと、近未来の言い知れぬ退廃化と滅亡の予感が漂うのです。

しかし一方、彼のこうした画面を観た瞬間、「美しい！」と感じてしまう私の心理は、いったい何故なのでしょうか……。私には、まだまだ解明できない課題なのでしょう。「美」を「きれいなもの」「心地いいもの」と安易に錯覚している作家にあふれる現代。絵画とは、芸術とは「真実」という姿をどう追求し、どう表現するのか。それが「美」を追求する絵描きの道標だと思っています。

彼の絵を見ているといつの間にか、目は画面から離れ眉間にしわを寄せて何かを考えさせられている自分に気付くのです。

TOPIC プラス NAVI

第59回学生美術全道展
── 札幌市民ギャラリー ──

会期　2017年10月７日㈯～10月10日㈫　４日間
午前10時～午後５時　※会期中無休
（最終日は午後４時30分まで）※入場無料
◆搬入　10月３日㈫　◆審査　10月４日㈬
◆陳列・新聞掲載　10月６日㈮
◆表彰式　10月８日㈰　◆搬出　10月10日㈫

昨年の市民ギャラリー会場

2018年　第73回全道展
── 目標に向かって ──

部　　門　絵画・版画・彫刻・工芸
会　　期　2018年６月13日㈬～６月24日㈰
札幌市民ギャラリー（中央区南２東６）
10：00～18：00（最終日16：30）
※18日㈪休館
入場料金　当日券800円　前売券600円
23歳以下・障がい者無料
出 品 料　３点まで8000円、１点追加ごとに1000円
23歳以下の出品料半額
（1995年４月２日以降に生まれた方）
搬　　入　６月５日㈫・６日㈬　10:00～17:00
賞　全道美術協会賞・北海道新聞社賞・八木賞・佳作賞・奨励賞

※６月16日㈯　第３回ギャラリートーク･作品講評会・表彰式・懇親会があります。多数のご参加を歓迎します。詳細は出品要領などの資料でご確認願います。

全道美術協会　検索
http://www.zendouten.jp

第７回　新鋭展
── 大通美術館（Ｂ・Ｃ室）──

会期　2017年11月７日㈫～11月12日㈰
◆搬入　11月６日㈪　◆搬出　11月12日㈰
オープニングパーティ　11月７日㈫18：00～
※ミニギャラリートークと会員による講評会を実施します。多数の皆様のご参加をお願いします。

新しい会場となった大通美術館での昨年の新鋭展

―菅訓章（すがのりあき）氏を偲ぶ・十勝の美術作家展の開催

2016年１月、まだ65歳という若さで亡くなられた前神田日勝記念美術館館長の菅訓章氏を偲び、その功績を讃える展覧会が今秋11月に開催される。

菅訓章氏は神田日勝の名と作品を全国各地に発信し、数多くの展覧会誘致を成功させ、優れた企画展等で全道展の作家たちとも親交があった。

同美術館関係者と、帯広在住の渡邉禎祥会員らが呼びかけ実施されるもので、開催に向け、地元各美術団体（主に道内三公募団体など）が協力支援し現在、準備が着々と進められている。

■展覧会名　―菅訓章氏を偲ぶ・十勝の美術作家展―
■開催期日　平成29年11月10日㈮～11月19日㈰
開館時間　10：00～17：00　13日㈪休館　入場無料
■会　　場　・鹿追町民ホール・ホワイトホール
・神田日勝記念美術館２Ｆ展示室
■出品作家　十勝在住者（絵画・版画・彫刻・工芸の４部門）

● 編集後記 ●

・今年の７月は何十年ぶりの記録的な酷暑で、本展の疲れを癒やす全道展の仲間の健康が気になった。今号が届く９月は…少し涼しくなっているように。
・庶務部の配属だった「ZEN編集担当」は「ZEN編集部」として独立（６月総会で決定）する。全道展を支える皆さんの寄稿で、交流・情報発信紙の内容は充実したものとなる。より有益な紙面となるよう編集部一同、認識を新たに頑張っていきたい。

〈本間・（文責）米澤・（写真協力）木滑〉